

# リベリアとシエラレオネにおける 若者の物質乱用

落合雄彦  
ベンジャミン・L・ハリス  
シテイ・オブ・レスト

## ▶ キーワード

リベリア  
シエラレオネ  
若者  
物質乱用  
ドラッグ

## ▼ 要 旨

本稿は、筆者らが紛争後のリベリアとシエラレオネにおいて実施した2つの物質乱用調査の結果を提示することで、紛争後の西アフリカ社会における都市部の若者の物質乱用の実像をより立体的に描き出そうとする試みである。具体的には、2008年にリベリアの首都モンロビアの中高生802名を対象に実施した物質乱用調査からは、第一に、もっとも広く使用されている物質はアルコールであること、第二に、合法的な嗜好品であるタバコよりも非合法的ドラッグであるマリファナの使用率の方が高いこと、第三に、アルコール、マリファナ、タバコのいずれの物質においても、男子生徒の方が女子生徒よりも使用率が高いことが明らかになった。他方、2009年にシエラレオネの首都フリータウンで中学生301名とドラッグ使用者95名を対象に実施した調査からは、ドラッグやアルコールの使用が学校内で相当程度広がっていると推察できること、先進国の都市社会と同様、あるいはそれ以上にストレスが大きいフリータウンという大会のなかで、若者がしばしば友人などからのプレッシャーや影響を受けながらドラッグを使用するようになり、その購入資金を獲得するために、インフォーマル・セクターでの労働から親類への無心、さらには窃盗や売春にいたるまでの多様な日常の営みをしている姿を垣間見ることができた。

## はじめに

筆者らは、2008年にリベリアの首都モンロビア（Monrovia）において、また、2009年に隣国シエラレオネの首都フリータウン（Freetown）においてそれぞれ若者の物質乱用に関する調査を実施した [Harris 2008; Harris et al. 2011; City of Rest 2009]。両調査はもともとまったく別個に企画・実施されたものであり、その調査項目や方法も相互にかなり異なっていた。しかし、1990年代に大規模な武力紛争を経験したリベリアとシエラレオネという西アフリカの国々に注目し、その紛争後の社会における都市部の若者の物質乱用に焦点をあてていたという点で、両者は明らかに通底している。また両調査は、2008年から2009年にかけての比較的近い時期に実施されたという意味で同時代性を共有していたともいえる。

本稿は、筆者らが紛争後のリベリアとシエラレオネにおいてほぼ同時期に実施した2つの物質乱用調査の結果を厳密な意味で「比較」するのではなく、むしろ読者のひとつの視野のなかにそれらを「併置」することで、紛争後の西アフリカ社会における都市部の若者の物質乱用の実像をより立体的に描き出そうとする試みにほかならない。

なお、本稿で「物質乱用（substance abuse）」というとき、それは「社会的に認められていない方法や目的で物質を使用すること」を意味し、その乱用対象となる物質のなかには、マリファナ、覚せい剤、ヘロイン、コカインといった、国際条約によって取引や使用が厳しく規制されている麻薬だけではなく、抗不安薬や睡眠薬のような医薬品、さらにはアルコールやタバコといった嗜好品も含むこととする。

## I リベリア都市部における若者の物質乱用調査（2008年）

### 1 調査実施の概要

筆者のうちベンジャミン・ハリスらは、2008年6月にリベリアのモンロビアにおいて中高生の物質乱用に関する調査を実施した [Harris 2008; Harris et al. 2011]。

同調査ではまず、モンロビア市内とその周辺地域を含むグレート・モンロビア（Greater Monrovia：以下、モンロビアと略す）にあるセカンダリー・スクールに対して物質乱用調査への協力依頼を書面で送付した。そして、調査協力の意向を表明してくれた学校に対して2名ずつの調査員を派遣し、生徒を対象にして質問票を用いた集合調査を実施した。同調査に参加してくれたセカンダリー・スクール数は全体で16校であり、その内訳は公立学校が6校、私立学校が10校であった。

各校ではまず、生徒に対して調査の目的や内容を説明した上で参加希望者を募った。そして、性別や学年のバランスについては特に考慮せずに調査参加者を先着順に50名選出した。なお、2校では1名多い51名が調査に参加することになったため、最終的には16校で802名の生徒が質問票に回答をしてくれた。

調査への参加意思を表明してくれた者のなかから先着順に選ばれた各校50名（2校では51名）の生徒は、正課の授業時間中に全員がひとつの教室に集められ、配布された質問票への記入を各自で行った。その際、生徒への心理的な影響が懸念されはしたものの、学校側を代表して学

校長による教室での立ち会いを求めた。なお、質問票への回答にあたっては、調査員側が質問票の記入方法、収集された情報の匿名性、プライバシーの保護などに関して生徒側に説明を行い、調査協力への最終的な意思を口頭で確認した。

## 2 結果

### (1) 基本属性

表1は、参加者の性別・年齢・学年を示したものである。同表にあるとおり、参加者の性別は802名のうち男性が388名（48.4%）、女性が379名（47.3%）、記入なし（不明）が35名（4.4%）であり、男女の比率はほぼ均衡していた。

調査に協力してくれた生徒の学年は、リベリアの教育制度でいうところの第7学年から第12学年までであり、それは日本の中学1年生から高校3年生までにほぼ相当するが、参加者を年齢別にみると、18歳以下の者が344名（42.9%）で半数にも満たないのに対して、19歳以上は445名で全体の55.5%にも達していた。この結果、日本の中高生に相当する学年を対象とした調査であるにもかかわらず、調査参加者の平均年齢は $19 \pm 3$ 歳、年齢の中央値は19歳となり、参加者の最高年齢は36歳にも及んだ。このように参加者の年齢がかなり高いのは、リベリアでは中退者がしばしば復学をしてきたり、留年（原級留置）者が毎年少なからず発生したりするという理由に加えて、1989年末に勃発した内戦のために通学できなくなった者が2003年の内戦終結後に大量に就学したことが一因と考えられる。

表1 参加者の性別・年齢・学年

|          | 人数（%）       | 年齢         |     |       |
|----------|-------------|------------|-----|-------|
|          |             | 平均値        | 中央値 | 範囲    |
| 性別       |             |            |     |       |
| 男性       | 388 (48.4)  |            |     |       |
| 女性       | 379 (47.3)  |            |     |       |
| 不明       | 35 (4.4)    |            |     |       |
| 合計       | 802 (100.0) | $19 \pm 3$ | 19  | 12–36 |
| 年齢       |             |            |     |       |
| 18歳以下    | 344 (42.9)  |            |     |       |
| 19歳以上    | 445 (55.5)  |            |     |       |
| 不明       | 13 (1.6)    |            |     |       |
| 合計       | 802 (100.0) | $19 \pm 3$ | 19  | 12–36 |
| 学年       |             |            |     |       |
| 第7–8学年   | 224 (27.9)  | $17 \pm 2$ | 17  | 12–29 |
| 第9–10学年  | 293 (36.5)  | $20 \pm 3$ | 19  | 13–35 |
| 第11–12学年 | 229 (28.6)  | $21 \pm 3$ | 20  | 14–36 |
| 不明       | 56 (7.0)    |            |     |       |
| 合計       | 802 (100.0) | $19 \pm 3$ | 19  | 12–36 |

出所) Harris et al. [2011 : 5] をもとに作成。

さらに、参加者を学年別でみると、第7-8学年（日本の中学1-2年生に相当）に在籍する者が224名（27.9%）、その平均年齢が $17 \pm 2$ 歳、年齢の中央値が17歳、範囲が12-29歳であったのに対して、第9-10学年（日本の中学3年から高校1年生に相当）は293名（36.5%）、その平均年齢は $20 \pm 3$ 歳、中央値は19歳、範囲は13-35歳であった。また、第11-12学年（日本の高校2-3年生に相当）については、参加者が229名（28.6%）、平均年齢は $21 \pm 3$ 歳、年齢の中央値は20歳、範囲は14-36歳であった。

## （2）アルコール

表2は、有効回答をしてくれた中高生のなかで、使用割合がもっとも高い3つの物質についてまとめたものである。同表に示されているとおり、もっとも使用者数が多かった物質は「アルコール」であり、773名の有効回答者のうち394名（51%）がアルコール使用の経験を有していた。次いで使用者数が多いのは「マリファナ」であり、746名の有効回答者のうち72名（9.7%）が使用経験者であり、3番目の「タバコ」は724名のうち47名（6.5%）が経験者であった。なお、これら3種類の物質を初めて使用した年齢の平均値を比較してみると、アルコールが $16 \pm 3$ 歳、マリファナが $17 \pm 3$ 歳、タバコが $16 \pm 3$ 歳でほとんど差がなく、そうした物質を初めて使用した年齢の範囲についても大きな差異は認められなかった。

表3は、アルコール使用を年齢別に示したものである。「アルコールを使用した経験がある」と回答した中高生の割合は51%であるが、リベリアの法定飲酒年齢である18歳を基準にして同年齢以下の回答者335名でみると、アルコール使用経験者は149名（44.5%）となる。他方、19歳以上の回答者438名のうち飲酒経験のある者は245名（55.9%）であった。また、過去1カ月間にアルコールを使用したかどうかを尋ねてみたところ、回答をしてくれた18歳以下のアルコール経験者127名のうち96名（75.6%）が過去1カ月間に少なくとも1回以上の飲酒経験があったのに対して、19歳以上では、過去1カ月以内に飲酒をした者の数は有効回答者198名のうち162名（81.8%）であった。

アルコール使用を性別で整理した表4によれば、男子生徒の飲酒経験者数は有効回答者380名のうち222名であり、その割合は58.4%であった。これに対して、女子生徒の飲酒経験者の割合は43.9%であり、男性より15ポイント程度低かった。しかし、飲酒経験者に対して過去1カ月間にアルコールを摂取したことがあるかどうかを尋ねたところ、男女ともに80%弱が「経験あ

表2 主要な物質使用

|            | 人数（%）          | 初めて使用した年齢  |       |
|------------|----------------|------------|-------|
|            |                | 平均値        | 範囲    |
| アルコール使用の経験 |                |            |       |
| あり／有効回答    | 394 (51.0)／773 | $16 \pm 3$ | 10-24 |
| マリファナ使用の経験 |                |            |       |
| あり／有効回答    | 72 (9.7)／746   | $17 \pm 3$ | 11-22 |
| タバコ使用の経験   |                |            |       |
| あり／有効回答    | 47 (6.5)／724   | $16 \pm 3$ | 8-23  |

出所) Harris et al. [2011: 6-10] をもとに作成。

表3 アルコール使用（年齢別）

|                   | 18歳以下（％）   | 19歳以上（％）   | 合計（％）      |
|-------------------|------------|------------|------------|
| アルコール使用の経験        |            |            |            |
| あり                | 149（44.5）  | 245（55.9）  | 394（51.0）  |
| なし                | 186（55.5）  | 193（44.1）  | 379（49.0）  |
| 合計                | 335（100.0） | 438（100.0） | 773（100.0） |
| 過去1カ月間のアルコール使用の経験 |            |            |            |
| あり                | 96（75.6）   | 162（81.8）  | 258（79.4）  |
| なし                | 31（24.4）   | 36（18.2）   | 67（20.6）   |
| 合計                | 127（100.0） | 198（100.0） | 325（100.0） |

出所) Harris et al. [2011 : 7] をもとに作成。

表4 アルコール使用（性別）

|                   | 男性（％）      | 女性（％）      | 合計（％）      |
|-------------------|------------|------------|------------|
| アルコール使用の経験        |            |            |            |
| あり                | 222（58.4）  | 163（43.9）  | 385（51.3）  |
| なし                | 158（41.6）  | 208（56.1）  | 366（48.7）  |
| 合計                | 380（100.0） | 371（100.0） | 751（100.0） |
| 過去1カ月間のアルコール使用の経験 |            |            |            |
| あり                | 143（79.4）  | 108（78.8）  | 251（79.2）  |
| なし                | 37（20.6）   | 29（21.2）   | 66（20.8）   |
| 合計                | 180（100.0） | 137（100.0） | 317（100.0） |

出所) Harris et al. [2011 : 8] をもとに作成。

り」と回答しており、その点での性差はみられなかった。

### (3) マリファナ

アルコールに次いで使用者数の多いのがマリファナである。表5は、マリファナ使用状況を年齢別に示したものである。同表によれば、マリファナ喫煙経験のある中高生は、746名の有効回答者のうち72名（9.7％）であり、それを年齢別にみると、18歳以下の生徒ではマリファナ喫煙経験者は330名のうち19名（5.8％）であるのに対して、19歳以上では416名中53名がマリファナ使用の経験があり、その割合は12.7％であった。また、マリファナ使用経験者に対して過去1カ月間にその使用経験があるか否かを尋ねたところ、47名の有効回答者のうち37名（78.7％）が「経験あり」と回答した。この点については、18歳以下のグループと19歳以上のグループの間で大きな差はみられなかった。

表6は、マリファナ使用状況を性別で整理したものである。同表によれば、マリファナ使用者の割合を性別で比較してみると、アルコールの場合と同様に男性の方が高く、男子生徒のマリファナ使用経験者の割合は13.3％（368名中49名）であるのに対して、女子生徒のそれは5.8％（360名中21名）であった。また、過去1カ月間のマリファナ使用経験者の割合も、男子生徒

表5 マリファナ使用（年齢別）

|                   | 18歳以下（％）    | 19歳以上（％）    | 合計（％）       |
|-------------------|-------------|-------------|-------------|
| マリファナ使用の経験        |             |             |             |
| あり                | 19 (5.8)    | 53 (12.7)   | 72 (9.7)    |
| なし                | 311 (94.2)  | 363 (87.3)  | 674 (90.3)  |
| 合計                | 330 (100.0) | 416 (100.0) | 746 (100.0) |
| 過去1カ月間のマリファナ使用の経験 |             |             |             |
| あり                | 10 (76.9)   | 27 (79.4)   | 37 (78.7)   |
| なし                | 3 (23.1)    | 7 (20.6)    | 10 (21.3)   |
| 合計                | 13 (100.0)  | 34 (100.0)  | 47 (100.0)  |

出所) Harris et al. [2011 : 9] をもとに作成。

表6 マリファナ使用（性別）

|                   | 男性（％）       | 女性（％）       | 合計（％）       |
|-------------------|-------------|-------------|-------------|
| マリファナ使用の経験        |             |             |             |
| あり                | 49 (13.3)   | 21 (5.8)    | 70 (9.6)    |
| なし                | 319 (86.7)  | 339 (94.2)  | 658 (90.4)  |
| 合計                | 368 (100.0) | 360 (100.0) | 728 (100.0) |
| 過去1カ月間のマリファナ使用の経験 |             |             |             |
| あり                | 29 (82.9)   | 7 (63.6)    | 36 (78.3)   |
| なし                | 6 (17.1)    | 4 (36.4)    | 10 (21.7)   |
| 合計                | 35 (100.0)  | 11 (100.0)  | 46 (100.0)  |

出所) Harris et al. [2011 : 10] をもとに作成。

では82.9％（35名中29名）であるのに対して、女子生徒では63.6％（11名中7名）であり、19ポイント程度低かった。

#### (4) タバコ

タバコは、日本と同様にリベリアにおいても合法的な嗜好品である。しかし今回の調査では、タバコの使用経験者の割合は6.5％であり、それは非合法ドラッグであるマリファナの使用経験者の割合（9.7％）よりも3ポイント程度低かった。

表7は、そうしたタバコ使用状況を性別に整理したものである。同表が示すとおり、男性の有効回答者364名のうちタバコ喫煙経験者は33名（9.1％）であるのに対して、女性の場合には360名中14名（3.9％）にすぎなかった。また、タバコの使用頻度をみてみると、男性の有効回答者26名のうち、少なくとも月1回程度の、いわばレクリエーショナルな喫煙経験者は11名（42.3％）、常習的な喫煙経験者は15名（57.7％）であるのに対して、女性の場合には有効回答者13名のうち実に11名（84.6％）が常習的な喫煙経験者で占められており、その割合は男性の場合よりも27ポイント近く高かった。

表7 タバコ使用（性別）

|            | 男性（％）       | 女性（％）       | 合計（％）       |
|------------|-------------|-------------|-------------|
| タバコ使用の経験   |             |             |             |
| あり         | 33 (9.1)    | 14 (3.9)    | 47 (6.5)    |
| なし         | 331 (90.9)  | 346 (96.1)  | 677 (93.5)  |
| 合計         | 364 (100.0) | 360 (100.0) | 724 (100.0) |
| タバコ使用の頻度   |             |             |             |
| 少なくとも月1回程度 | 11 (42.3)   | 2 (15.4)    | 13 (33.3)   |
| 頻繁         | 15 (57.7)   | 11 (84.6)   | 26 (66.7)   |
| 合計         | 26 (100.0)  | 13 (100.0)  | 39 (100.0)  |

出所) Harris et al. [2011 : 9] をもとに作成。

### (5) そのほか

そのほかにも今回の調査では、「ココ (coco)」という隠語で呼ばれるコカイン、「イタリアン・ホワイト (Italian White: 通称ターホワイト)」「ドゥジー (dugée)」「ブラウン・シュガー (brown sugar)」などと通称されるヘロイン、「バブル (bubble)」と呼ばれるドラッグ<sup>1)</sup>などが、その使用者数は数名程度とかなり限定的とはいえ、リベリア都市部の一部の中高生の間で乱用されていることが確認された。

## 3 ディスカッション

モンロビアの中高生802名を対象にしたハリスらの調査結果からは、物質乱用について少なくとも以下のような3つの点が明らかになった。

第一に指摘できるのは、モンロビアの中高生の間でもっとも広く使用されている物質はアルコールである、という点である。今回の調査では51%の中高生が「飲酒経験あり」と回答した。この数値は、ハリスが内戦中の1995年にやはり同地域の中高生500名を対象にして実施した類似の調査の結果とほぼ同水準であり、そのことは、モンロビアにおいては内戦中も内戦後も中高生の飲酒割合にあまり大きな変化がみられなかった可能性を示唆している [Harris 1995]。

なお、今回の調査は中高生を対象としていたとはいえ、その回答者の55.5%が19歳以上の者で占められていた事実を考慮すれば、51%という飲酒経験率は、たとえば日本などと比してけっして高くないようにみえる。しかしそれは、アフリカ諸国間で比較すると、かなり高い飲酒率といえる。たとえば、ケニアの首都ナイロビ (Nairobi) の中高生1254名を対象にしたある調査によれば、飲酒率は38.6%であった。しかも同調査の回答者の年齢幅は13-24歳であり、モンロビアの調査ほどではないものの、その年齢層はかなり高めであった [Ndeti et al. 2009]。また、ナイジェリア南西部オシュン (Osun) 州のセカンダリー・スクールに通う562名の中高生を対象にした調査でも、都市部の学校に通う中高生の飲酒率は26%にすぎなかった [Fatoye and Morakinyo 2002]。これらの調査を勘案すると、50%前後というモンロビアの中高生の飲酒率は他のアフリカ諸国の都市部よりも総じて高い可能性がある。

第二に、モンロビアの中高生の間では、合法的な嗜好品であるタバコよりも非合法的なドラッ

グであるマリファナの使用率の方が高い、という点を指摘できる。合法的タバコよりも非合法的マリファナの使用率の方が高いというこの「逆転現象」の主因としては、マリファナの価格の安さ、マリファナへのアクセスのしやすさ、そして、マリファナに対して抱く文化的な親近感の高さを挙げることができよう。

モンロビアにおけるマリファナの価格は、質によって異なるほか季節によっても若干変動するが、総じて安価である<sup>2)</sup>。筆者のうち落合雄彦らが2009年にモンロビアで行った聞き取り調査では、マリファナ1回分の価格は10-25リベリアドル（日本円で15-35円程度）であり<sup>3)</sup>、それは同国のごく一般的な銘柄のタバコ1本あたりの価格（2.5リベリアドル=3.8円程度）よりはたしかに高いものの<sup>4)</sup>、それでも中高生が十分に購入可能な廉価な水準にあった。

また、モンロビアではマリファナへのアクセスが比較的容易であるという点も、中高生のマリファナ使用率の相対的な高さに影響しているようにみえる。マリファナは、「ゲットー（ghetto）」と呼ばれるドラッグ売買・喫煙場所のほか、街中の露店や行商の売り子などを通じて容易に入手できる。

リベリアでは、マリファナの原料となる大麻（カンナビス）が、ボン（Bong）、ロファ（Lofa）、ニンバ（Nimba）の各州を中心にして全国で広く栽培されており、そうした地方で生産されたマリファナは一大消費地であるモンロビアへと毎日のように輸送されてくる。モンロビアへといたる主要幹線道路には、ドラッグや銃器などの移動を阻止するために警察のチェックポイントが設けられてはいるものの、マリファナの生産者や仲買人は運搬車両のなかにマリファナを巧妙に隠したり、警察によるチェックを避けるために迂回路を経由したり、発見をされた場合でも警察官を買収したりすることでマリファナをモンロビアへと運び込む。そして、生産者や仲買人は「ゲットー・マスター（ghetto master）」と呼ばれるゲットーのオーナーやドラッグの密売人にマリファナを売却し、それがゲットー、バー、ナイトクラブ、露店、行商の売り子などを通じて若者を含む一般消費者へと広く販売されるのである。

なお、モンロビアでは警察によるドラッグの取締が一応行われてはいるものの、その一方で警察幹部がゲットー・マスターやドラッグの密売人たちから「上納金」を毎週受け取るという悪習がいまなお一部に残されており<sup>5)</sup>、そうした警察とドラッグ業者の間の癒着のために、モンロビアにおけるドラッグ取締はごく皮相的かつ限定的な範囲のものにとどまっている。そして、そうした生産・輸送・販売という一連の流通プロセスの「整備」や取締当局の腐敗などによって、マリファナは今日、モンロビアの若者にとってアクセスのごく容易なドラッグとなっているのである。

前述の価格の低廉さ、アクセスの容易さに加えて、中高生の間でマリファナの使用率がタバコよりも高い一因と考えられるのが、マリファナに対する文化的な親近感の高さである。リベリアでは、タバコは文化的にエイリアンな外来品とみなされ、健康上も有害と考えられている。これに対してマリファナは、たしかに非合法ではあるものの天然植物を乾燥させただけのハーブであり、タバコのように健康を損ねることはなく、むしろ食欲増進などの効能をもつとみなされている。

以上のような価格の低廉さ、アクセスのしやすさ、親近感の高さのために、モンロビアの中高生の間ではマリファナがタバコよりも広く使用されているものと推察される。

最後に、今回の調査から明らかになった第三の点としては、アルコール、マリファナ、タバ

コのいずれの物質においても、男子生徒の方が女子生徒よりも使用割合が高い、という点を指摘できよう。アルコールでは男子生徒の方が女子生徒よりも使用率が14.5ポイント、マリファナでは7.5ポイント、タバコでは5.2ポイントそれぞれ高かった。ただし、タバコに関しては、男性よりも女性の方が喫煙者のなかでの常習傾向が強かった。

## Ⅱ シエラレオネ都市部における若者の物質乱用調査（2009年）

### 1 調査実施の概要

筆者のうちシティ・オブ・レストは、2009年3月から9月にかけてフリータウン市内とその周辺の西部地域（Western Area：以下、フリータウンと略す）において若者の物質乱用に関する調査を実施した。同調査では、小中学生のほか教員、警察官、ドラッグ使用者、医療関係者などを対象にして質問票やフォーカス・グループ・ディスカッションを用いた複数の調査を実施したが、本稿ではそのうち2種類の調査——すなわち、①中学3年生を対象にしたアンケート調査と②ドラッグ使用者を対象にしたグループ・ディスカッション——の結果を報告する。

中学3年生（主に15–17歳）を対象にしたアンケート調査ではまず、フリータウンにあるすべてのセカンダリー・スクールをリストアップし、そのなかから11校を無作為抽出した。そして、それらの学校に対して調査協力依頼を打診したところ、10校（男子校5校、女子校2校、共学3校）<sup>6)</sup>から承諾がえられた。そこで、これら10校に対して調査員を派遣し、各校30名ずつ（1校では31名）、合計で301名の中学3年生を対象にしてアンケートを用いた集合調査を実施した。

他方、ドラッグ使用者を対象とした調査では、フリータウンにある6カ所のゲッターに調査員を派遣し、フォーカス・グループ・ディスカッションを行った<sup>7)</sup>。同ディスカッションへの参加者数は計95名であった。

### 2 結果

#### (1) 中学3年生を対象にしたアンケート調査

表8は、調査参加者がドラッグとして指摘した物質（複数回答可）を示したものである。同表が示すとおり、フリータウンの中学3年の調査参加者がドラッグとしてもっとも多く指摘したのは「マリファナ」であった。シエラレオネでは、マリファナは共通語のクリオ（Krio）語で「ジャンバ（djamba）」と呼ばれ、リベリアと同様に広く乱用されている。次いで47%の回答者がドラッグとして「コカイン」、31%が「ヘロイン（クリオ語で「ブラウン・ブラウン（brown-brown）」）」<sup>8)</sup>を挙げている。このほか、「タバコ」をドラッグとして指摘した者が13%いたほか、抗精神病薬である「クロルプロマジン（Chlorpromazine）」を挙げた者も8%いた。クロルプロマジンは、シエラレオネでは入手に医師の処方箋が必要とされているが、実際には処方箋なしでの購入が可能であり、「テイク・オーバー・ミー（Take Over Me）」という隠語で呼ばれ、従来から広く乱用されてきた。

表9は、ドラッグについての情報源を整理したものである。ドラッグの情報源として「学校

(授業など)」を指摘した者が47%、「友人」を挙げた者が43%、「ラジオ・テレビ・音楽」を挙げた者が43%いた。このほか、「ドラッグを使用している知人や親類」からドラッグの情報をえたと回答した者が11%みられた。

表10は、ドラッグの入手先として指摘された場所を示したものであり、71%の回答者がドラッグは「ゲッター」で入手可能であると回答した。このほか、「行商の売り子」を挙げた者が39%、「露店」を指摘した者が36%いた。

表11は、アルコールとドラッグの使用に関するいくつかの質問とその回答結果をまとめたものである。同表によれば、「アルコールとドラッグ、あるいはそのいずれかを使用した経験がある」と回答した者が15%、逆に「経験がない」と答えた者が71%、「記入なし」の者が14%い

表 8 ドラッグとして指摘された物質（複数回答可）

| 種類                    | %  |
|-----------------------|----|
| マリファナ（ジャンパ）           | 54 |
| コカイン                  | 47 |
| ヘロイン（ブラウン・ブラウン）       | 31 |
| タバコ                   | 13 |
| クロルプロマジン（テイク・オーバー・ミー） | 8  |

出所) City of Rest [2009 : 30] をもとに作成。

表 9 ドラッグに関する情報源（複数回答可）

| 種類             | %  |
|----------------|----|
| 学校（授業など）       | 47 |
| 友人             | 43 |
| ラジオ・テレビ・音楽     | 43 |
| 親              | 28 |
| ドラッグを使用する知人・親類 | 11 |
| そのほか           | 4  |

出所) City of Rest [2009 : 30-31] をもとに作成。

表10 ドラッグが入手できる場所（複数回答可）

| 種類        | %  |
|-----------|----|
| ゲッター      | 71 |
| 行商の売り子    | 39 |
| 露店        | 36 |
| 学校内       | 5  |
| 学校周辺      | 5  |
| バー、ナイトクラブ | 2  |
| そのほか      | 3  |

出所) City of Rest [2009 : 32] をもとに作成。

表11 アルコールとドラッグの使用

|                                         |
|-----------------------------------------|
| Q. アルコールとドラッグ、あるいはそのいずれかを使用した経験がありますか。  |
| ある (15%)                                |
| ない (71%)                                |
| 記入なし (14%)                              |
| Q. アルコールとドラッグ、あるいはそのいずれかを現在使用していますか。    |
| 使用している (8%)                             |
| 使用していない (66%)                           |
| 記入なし (26%)                              |
| Q. アルコールやドラッグをより多く使用するとあなたが思う性別はどちらですか。 |
| 男性 (69%)                                |
| 女性 (0%)                                 |
| 記入なし (31%)                              |
| Q. 友人のなかにアルコールやドラッグを校内で使用している者がいますか。    |
| いる (37%)                                |
| いない (21%)                               |
| 回答なし (42%)                              |
| Q. アルコールやドラッグを使用する理由は何だと思えますか。          |
| ストレスに対処するため (25%)                       |
| スマートになるため (14%)                         |
| 遅くなるため (12%)                            |
| ハイな気分になるため (8%)                         |

出所) City of Rest [2009 : 32-34] をもとに作成。

た。また、「アルコールとドラッグ、あるいはそのいずれかを現在使用している」と回答した者の割合は8%にすぎないのに対して、「使用していない」と回答した者は66%、「記入なし」の者は26%であった。

アルコールやドラッグをより多く使用する性別については、69%の生徒が「男性」を挙げたが、「記入なし」の者も31%いた。また、「友人のなかにアルコールやドラッグを校内で使用している者がいますか」という質問に対して「いる」と回答した者が37%であったのに対して、「いない」と回答した者が21%、「記入なし」が42%であった。さらに、アルコールやドラッグを使用する理由としては、「ストレスに対処するため」が25%、「スマートになるため」が14%、「遅くなるため」が12%、「ハイな気分になるため」が8%であった。

## (2) ドラッグ使用者を対象にしたグループ・ディスカッション

フリータウンには数多くのゲッターが存在するが、その客は一般に固定客であることが多い。それは別言すれば、顧客は不特定のゲッターを訪れて喫煙や飲酒をするのではなく、多くの場合、自宅や勤務先の周辺に「マイ・ゲッター」ともいうべき「自分の行きつけのゲッター」をそれぞれもち、主にそのゲッターに通っているということを意味する。このようにゲッターと顧客の間の関係性がある程度固定的であるということは、けっして驚くに値しない。というの

も、ゲッターでは非合法なマリファナなどが販売されるため、ゲッター・マスター側が「一見の客」を警戒するのはしごく自然のことだからであり、逆に顧客の側も、顔見知りばかりが集まるような安心できる場所で喫煙や飲酒を楽しみたいと考えるからである。なお、各ゲッターの客層はその場所や周辺環境によっても大きく異なっており、たとえば、高校生や大学生を主な顧客としているゲッターもあれば、主要な客層が中高年のドライバー、労働者、失業者などであるゲッターもある。

ゲッターでは、タバコやマリファナのほか、クリオ語で「ポヨ (poyo)」と呼ばれるやし酒、「ペガパック (Pega Pack)」や「ビータコーラ (Beeta Kola)」の名称で知られているジン（蒸留酒）などが販売されている。通常フリータウンのゲッターには電気が来ていないため、冷却を要するビールや炭酸飲料などはあまり売られていない。そうしたビールや炭酸飲料が売られているのはバーやナイトクラブである。このほか、ゲッターによってはキャンディーやスナックを販売したり、「ガンパウダー (Gunpowder)」と呼ばれる中国産緑茶（平水珠茶）でつくられた温かくて甘い「アタヤティー (attaya tea)」を売ったりするケースもある。アタヤは通常、ゲッターではなく「アタヤベース (attaya base)」と呼ばれる道路沿いの専用スペースで販売されるが、ゲッターで売られるアタヤには、客の要望によってマリファナを入れて煮出したものがあり、特別に「ドウス (dose)」と呼ばれている。

ゲッターではマリファナは広く販売されているが、必ずしもヘロインやコカインが売られているわけではない。そうしたハードドラッグが販売される場所のことをフリータウンでは「カルテル (cartel)」と呼び、ゲッターと区別することが多い。しかしドラッグを使用しない一般の人々は、ゲッターとカルテルを必ずしも明確に区別せず、両者をまとめてゲッターと総称することが少なくないようである。

表12は、そうしたゲッターで実施したグループ・ディスカッションの参加者95名の性別と年齢を示したものである。この調査では、男性の参加者が92名（96.8%）と圧倒的に多く、女性は3名（3.2%）にすぎなかった。また、参加者を年齢別にみると、15-19歳が5名（5.3%）、20-24歳が27名（28.4%）、25-29歳が22名（23.2%）であり、10代と20代の若者が全体の56.9%を占めていた。これに対して、30-34歳の者が14名（14.7%）、35-39歳が7名（7.4%）、40-49歳が9名（9.5%）、50歳以上が11名（11.6%）いた。

ゲッターに通うドラッグ使用者を対象とした今回のフォーカス・グループ・ディスカッションからは、以下のような知見をえることができた。

まず「ドラッグ使用の理由」について尋ねたところ、グループ・ディスカッションのなかでは、「ストレス」「不満」「トラウマ」に加えて、「不幸」「貧困」「失業」「孤独」などへの言及が多くみられた。また、「仲間からのプレッシャー」や「仲間として受け入れられたいという気持ち」をドラッグ使用の理由として挙げる者も少なくなかった。

「ドラッグがもたらすネガティブな効果」については、「死亡を含む健康上の問題」や「精神病」がもっとも頻繁に指摘された。また、「攻撃性」や「犯罪行為」をドラッグ使用のネガティブな効果として挙げる者もいた。

「ドラッグ入手のための収入源」としては、「肉体労働」や「インフォーマルで不定期な雑労働」に加えて「犯罪行為（窃盗や詐欺など）」を挙げる者がもっとも多く、次いで「売春」「ギャンブル」「物乞い」「知人・家族への無心」などが指摘された。

表12 参加者の性別・年齢

|        | 人数 (%)     |
|--------|------------|
| 性別     |            |
| 男性     | 92 (96.8)  |
| 女性     | 3 (3.2)    |
| 合計     | 95 (100.0) |
| 年齢     |            |
| 15-19歳 | 5 (5.3)    |
| 20-24歳 | 27 (28.4)  |
| 25-29歳 | 22 (23.2)  |
| 30-34歳 | 14 (14.7)  |
| 35-39歳 | 7 (7.4)    |
| 40-49歳 | 9 (9.5)    |
| 50歳以上  | 11 (11.6)  |
| 合計     | 95 (100.0) |

出所) City of Rest [2009: 43] をもとに作成。

「ドラッグの供給源」について尋ねたところ、「ナイジェリア」「南米」「ギニア」「カルテル」「ゲッター」「薬局」についての言及がみられた。また、「外交官」や「宗教団体」をドラッグの供給源として指摘する者もいた。シエラレオネでは、前述のとおりマリファナの原料になるカンナビスは国内生産されているが、ヘロインやコカインといったハードドラッグは国外から密輸入されており、そうしたハードドラッグ密輸の多くにはナイジェリア人の密売人が関与していると考えられている。また、そうしたドラッグ密輸には、外交特権や旅券を悪用するアフリカ人の外交官や宗教活動を装って私腹を肥やす教会指導者が関わっていると噂されることが少なくない。

### 3 ディスカッション

中学3年生301名を対象にしたアンケート調査とドラッグ使用者95名を対象にしたゲッターでのグループ・ディスカッションの結果から、フリータウンにおける若者の物質乱用の特徴として少なくとも以下の2点を指摘できよう。

第一に、中学生を対象としたアンケート調査からは、フリータウンでは、ドラッグやアルコールの使用が学校の敷地内で相当程度広がっていると推察できる。今回の調査では、マリファナやアルコールといった物質別の使用率については調査しなかったものの、「アルコールとドラッグ、あるいはそのいずれかを使用した経験がありますか」という質問に対して「経験あり」と回答した中学生はわずか15%、「アルコールとドラッグ、あるいはそのいずれかを現在使用していますか」という質問に対して「使用している」と回答した者は8%にすぎなかった。その意味では、モンロビアの中高校生と比して、フリータウンの中学生の間におけるアルコールやドラッグの乱用はそれほど深刻ではないように一見みえる。

しかし、「友人のなかにアルコールやドラッグを校内で使用している者がいますか」という質

問に目を転じてみると、状況はやや異なる。この質問に対して37%の生徒が「いる」と回答しており、さらに留意すべきは同質問に対する回答を拒んだ者が42%もいたという点である。今回の調査では、回答者の匿名性が約束されていたとはいえ、調査に参加してくれた中学生のなかには、それに疑問を抱き、学校という公の場における集合調査で自分自身や友人による物質乱用について「告白（告げ口）」することを躊躇した者が少なからずいたにちがいない。「友人のなかにアルコールやドラッグを校内で使用している者がいますか」という質問に対する回答拒否者が全体の4割強にも及んだという事実は、その可能性を強く示唆している。友人の物質使用、特に校内における友人の物質使用についてもし告白してしまえば、やがてそのことが学校側に伝わって厳しい取締や処罰が友人に対してなされるかもしれないし、その結果、自分が友人からいじめを受けるかもしれないということを、中学生の参加者が恐れたとしても、それ自体けっして不思議なことではない。つまり、友人による校内での物質使用に関する質問への回答拒否者が4割にも及んだという事実からは、アルコールやドラッグが校内で使用されていると認識している者の割合は37%に留まらず、実際にはそれよりもかなり高い可能性があるということを読み取るべきであろう。とすれば、フリータウンでは、校内における物質使用が相当程度広くみられると推察できよう。

そして同様のことが、フリータウンの中学生の間におけるドラッグやアルコールの使用率についてもいえる。今回の調査では、ドラッグやアルコールを使用したことがあると回答した者は15%、現在も使用していると答えた者は8%にすぎなかったが、それらは必ずしも実態を的確に反映していないかもしれない。要するに、物質乱用という、中学生にとってかなりセンシティブな問題を学校での集合調査で果たしてどれほど精確に把握できるのか、あるいは、正しく把握するためにはどのような調査上の配慮がなされるべきなのかという、今回の調査方法が孕み持つ限界や課題がそこには浮き彫りにされているようにみえる。

第二に、ドラッグ使用者に対するゲッターでのグループ・ディスカッションからは、先進国の都市社会と同様、あるいはそれ以上にストレスが大きいフリータウンという大都会のなかで、若者がしばしば友人からのプレッシャーや影響を受けながらドラッグを使用するようになり、その購入資金を獲得するために、インフォーマル・セクターでの労働から親類への無心、さらには窃盗や売春にいたるまでの多様な日常の営みをしている姿が垣間見られた。

## むすびに代えて

以上、筆者のうちハリスらが2008年6月にリベリアのモンロビアにおいて中高生を対象に実施した調査と、シティ・オブ・レストが2009年3月から9月にかけてシエラレオネのフリータウンにおいて中学生とドラッグ使用者を対象に実施した一連の調査の結果をまとめた。前述のとおり、この2種類の調査はまったく別個に企画・実施されたものであり、両者を軽々に比較することはできない。しかし、リベリアとシエラレオネという西アフリカの紛争後社会における都市部の若者の物質乱用に焦点をあてていたという点で両者は明らかに通底しており、また、調査実施時期が近いという意味で同時代性を共有していたともいえる。そして、ここではあえて繰り返さないが、そうした調査結果からは、両国の都市部に暮らす若者の物質乱用のいくつかの特徴が浮き彫りになった。

ところで、国連薬物犯罪事務所（United Nations Office on Drugs and Crime：UNODC）の年次報告書によれば、マリファナを中心とするカンナビスの使用者の割合（2009年時点）は、世界全体の低位推計が2.8%（1億2481万人）、高位推計が4.5%（2億268万人）であった。これに対して、アフリカは低位推計でも3.8%（2163万人）、高位推計であれば実に10.4%（5914万人）に達しており、あくまでも高位推計でいえば、アフリカのカンナビス使用者の割合は世界平均の2倍以上であった〔UNODC 2011：176〕。そして、ハリスらの調査によって明らかになった9.7%というモンロビアの若者におけるマリファナ使用経験者の割合は、UNODCによる2009年時点のアフリカ全体の高位推計値10.4%にかなり近い数値といえる。

これに対して、シティ・オブ・レストによるフリータウンでの調査では、マリファナを含む物質の使用率は総じて低い数値しか示さなかった。そのことは、若者の物質乱用の実態を学校という公の場での集合調査によって把握することの難しさや限界を示唆している。その意味で、ともに学校での集合調査を基本としながらも、ハリスらによるモンロビアでの調査とシティ・オブ・レストによるフリータウンでの調査はかなり対照的であったといえるかもしれない。

**付記** 本稿は、日本学術振興会（JSPS）科研費21402036、23401017の助成を受けたものである。

また、本稿は、Harris [2008], Harris et al. [2011], City of Rest [2009] を大幅に加筆修正したものである。なお、City of Rest [2009] のもとになった、シエラレオネでの調査の実施にあたっては、オランダに本部を置く国際NGO「カトリック救援開発支援機構（Catholic Organisation for Relief and Development Aid：CORDAID）」からの資金援助を受けた。CORDAIDには、同調査の結果を本稿のなかに含めることについて快諾をいただいた。ここに記してCORDAIDへの謝意を表したい。

## 注

- 1) リベリアで「バブル」と呼ばれる依存性物質については、それをアンフェタミン（覚せい剤）とする指摘もある〔Bernard et al. 2003：86〕。しかし、その成分は必ずしも定かではない。
- 2) マリファナ生産のためには大麻（カンナビス）を収穫後に乾燥させる必要があるが、リベリアの乾季（毎年11月頃から4月頃までの時期）にはその乾燥作業が比較的容易なため、マリファナの価格は下がる傾向にある。他方、雨季（毎年5月頃から10月頃までの時期）には乾燥のために薪などを使用しなければならず、その分のコストが上乗せされるため、マリファナの消費者価格は上昇するという。リベリア司法省の「麻薬取締局（Drug Enforcement Agency：DEA）」の副局長であるレジナルド・テイ（Reginald E. Tay）へのインタビュー（2009年8月21日、モンロビア）による。
- 3) テイ DEA 副局長へのインタビュー（2009年8月21日、モンロビア）。
- 4) WHO [2011：Appendix V] によれば、リベリアのもっとも一般的な銘柄のタバコの価格は、1箱（20本入り）が50リベリアドル（75円程度）であったという。
- 5) ドラッグ依存症者への支援活動を行っている「フェイス・ワールド・アウトリーチ・ミッション（Faith World Outreach Mission）」という教会の牧師サミュエル・ヌノー（Samuel Nunoo）へのインタビュー（2010年9月6日、モンロビア）。
- 6) 調査協力校10校は以下のとおり。
  - ・ Independence Government Memorial School（共学）
  - ・ Muslim Congress Boys Secondary School（男子）
  - ・ Methodist Boys High School（男子）

- ・ Annie Walsh Memorial Secondary School for Girls (女子)
- ・ Albert Academy Secondary School (男子)
- ・ Government Model Secondary School (共学)
- ・ St. Edward's Secondary School for Boys (男子)
- ・ Methodist Girls High School (女子)
- ・ West African Methodist Collegiate School for Boys (男子)
- ・ Juba Services School (共学)

7) 調査したフリータウン市内のゲッター 6 カ所は以下のとおり。

- ・ サーキュラー・ロード(Circular Road) そばの「テキサス (Texas)」
- ・ タワーヒル(Tower Hill) 地区の「ヒル・ストリート (Hill Street)」
- ・ キッシー・ドックヤード(Kissy Dockyard) 地区の「ビンコロ (Binkolo)」
- ・ ラムリー・ビーチ(Lumley Beach) 地区の「パッサンデイ (Passanday)」
- ・ モーリータウン(Murray Town) 地区の「モーリータウン・ベネフィット・ワーフ (Murray Town Benefit Wharf)」
- ・ アバディーン(Aberdeen) 地区の「タンバ・クラ・ワーフ (Tamba Kulah Wharf)」

8) 「ブラウン・ブラウン」は、内戦中はコカインと火薬の混合物を指すことが多かったが、今日では主にヘロインの隠語となっている。

## 参考文献

- Bernard, Belinda, Brian Brewer, Sahana Dharmapuri, Edwin Dobor, Art Hansen and Sue Nelson (2003) *Assessment of the Situation of Women and Children Combatants in the Liberian Post-Conflict Period and Recommendations for Successful Integration*, a paper prepared for Short-Term Technical Assistance and Research under EGAT/WID Management to Support USAID Washington and Field Mission Anti-Trafficking Activities GEW-I-00-02-00017-00 Task Order #1 (ATTO) (<http://pdf.usaid.gov/> 2012年5月3日アクセス).
- City of Rest (2009) *The Scale and Impact of Substance Abuse among School Children and Youth in Freetown/the Western Area, Sierra Leone*, Freetown: City of Rest.
- Fatoye, F.O., and O. Morakinyo (2002) "Substance Use amongst Secondary School Students in Rural and Urban Communities in South Western Nigeria," *East African Medical Journal*, 79(6), pp. 299-305.
- Harris, Benjamin L. (1995) *Psychoactive Substance Use in Monrovia High School Students*, an unpublished paper.
- (2008) *Substance Abuse and Sexual Behavior Assessment: High School Students in Monrovia*, an unpublished paper.
- Harris, Benjamin L., Elizabeth J. Levey, Christina P.C. Borba, Deborah A. Gray, Julia R. Carney and David C. Henderson (2011) "Substance Use Behaviors of Secondary School Students in Post-conflict Liberia: A Pilot Study," *International Journal of Culture and Mental Health*, iFirst, pp. 1-12.
- Ndeti, David M., Lincoln I. Khasakhala, Victoria Mutiso, Francisca A. Ongecha-Owuor and Donald A. Kokonya (2009) "Patterns of Drug Abuse in Public Secondary Schools in Kenya," *Substance Abuse*, 30(1), pp. 69-78.
- United Nations Office on Drugs and Crime (UNODC) (2011) *World Drug Report 2011* (<http://www.unodc.org/> 2011年11月16日アクセス).
- World Health Organization (WHO) (2011) *WHO Report on the Global Tobacco Epidemic, 2011: Warning about the Dangers of Tobacco* (<http://www.who.int/tobacco/> 2012年5月4日アクセス).